

様式1 令和2年度 山梨県立富士見支援学校本校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	子どもたちの病状に配慮し、健康の回復を図りながら、義務教育における学習空白を補完するとともに、社会の中で人と関わりながら生きていくための力を育む。
-----------	---

山梨県立富士見支援学校校長 中村千尋

本年度の重点目標	1 児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。
	2 健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。
	3 病弱児教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。

達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)
	B	概ね達成できた。(6割以上)
	C	不十分である。(4割以上)
	D	達成できなかった。(4割以下)

評価	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

自己評価			年度末評価(2月4日現在)		
番号	評価項目	本年度の重点目標 具体的方策 方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。	合理的配慮を踏まえた個別の教育支援計画を作成・活用する。個別の指導計に基づいた学習の状況や結果を適切に評価し、指導の改善を図る。 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%) ICT教材の活用や体験的活動など、指導法を工夫することにより、わかる喜びを実感できる授業を行い、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・個別の教育支援計画については、保護者との合意形成を十分に図りながら、具体的な合理的配慮の内容等に関して詳細に記した文書を作成し、活用することができた。 ・個別の指導計画については、小学部に関しては新学習指導要領を踏まえた新たな指標に基づいて評価を行い、その妥当性については職員間の討論を通して十分に検証することができた。 ・iPadの多様な操作法について、研修や伝達の機会を設けたことにより、授業や行事等に際して活用する頻度が増した。 ・Teams等の機能について、共有する機会を設け、授業等への活用が見られた。また、それらを活用する上での情報モラルについても学ぶ機会となった。	B A A	・保護者の理解を促す中で、本年度はより多くの児童生徒に関して個別の教育支援計画を作成、活用することができた。引き続き、より具体的ななどとの合理的配慮等に関して、保護者や進学の小中学校等と十分な合意形成を図る中で、全児童生徒の作成を目指していく。 ・個別の指導計画に関しては、新学習指導要領の指導等を踏まえて計画・実施し、中学期の評価に関しては新しい指標を活用し、よりよい指導・支援に努めている。 ・病棟も含めた授業への活用、前籍校との連携をさらに推進するために、様々なICT機器の利用方法について、さらに見直しを深め、職員が積極的に教材作りをしていけるような土台を作る必要がある。
2	健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、自立を目指す態度を育成する。	教育課程に児童生徒の心身の状態を考慮した系統的・体系的なキャリア教育を位置づけ、その充実を図る。 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%) 道徳教育や保健教育と関連させ学校生活全体を通して、自他を大切にすることを育て、基本的な生活習慣を身につけさせる。 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・今年度はコロナ感染症対策として職場体験学習が実施できなかったが、進路指導年間計画を参考に各学年で実態に合った指導を行った。中学期3年生に関しては、前籍校への授業体験や試験などの登校を含めて、中学校との連携をしながら進めてきた。 ・児童生徒の実態把握を的確に行い、身につけさせたい力を教師間で確認し、具体的な支援方法を検討・実施することができた。 ・道徳教育全体計画に基づき実施した。保健委員会の活動を通して、自己の役割を自覚し、協働の意義を学ぶことができた。 ・保健体育の授業や特別活動等を通して心身の状況把握と課題課題に向けた取り組みができた。養護教諭による保健指導をができた。発達段階に応じて実施することができた。 ・コロナ感染症予防対策を最重要視して行った。	A A	・来年度も一人一人児童生徒の実態把握を丁寧に行い、教員間で共通理解を図り、適切な支援を検討していく。 ・来年度、コロナ感染症が落ち着き安全性が確保されたら職場体験学習を計画・実施し、キャリア教育やキャリアパスポートをさらに充実できるようにする。 ・道徳教育全体計画を教師全体で確認し、それに沿いながら学校生活全般において体験的な学びを行い、その後の実践につなげていく。 ・医療や保護者と密に連携し、心身の状況を把握、調整しながら行う学習活動を今後も計画的・継続的に進めていく。 ・新しい生活様式に基づいた感染症予防に傾注したい。
3	病弱児教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。	積極的な情報発信を行い、病弱児教育への理解と啓発に努めるとともに、関係機関との連携を充実させる。 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%) 「高校生こころのサポートルーム活用事業」について、関係機関及び高等学校との連携をさらに深め、専門家の助言を受けながら相談支援の充実を図る。 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・今年度はHPのリニューアルを行い、より一層の内容充実を図るとともに、保護者への緊急連絡やタイムリーな情報発信に努めることができた。 ・病弱連携会議では、新型コロナウイルス蔓延が影響し、年間計画を変更したが、関係者の協力の下、研修会や会議を実施することができた。 ・6月中旬より相談を受け付けたが、来室が引きこもりを予防したり、学校休業明けの不安定な心身を安定させることにつながった。 ・転籍後も一定期間来室対応するシステムに変更し、生徒が焦らずに新しい環境に適応できるよう支援することができた。 ・高校生を持つ保護者からの電話相談が多く、専門家と相談し、予防的あるいは緊急的措置として高校と連携が始まる前から来室相談に対応した。	A A	・HPは引き続き内容の充実を図り、最新の情報発信や保護者等への緊急連絡に大いに活用していきたい。 ・病弱学級が年々増加し、連携会議への多様なニーズに応えるため、市町村教育委員会と連携し、充実を図る。 ・ここサポの支援について高校の理解を得るためには、高校の担当者が年度末に終わることも想定して、各機関と連携して年間を通して周知に取り組み。 ・生徒と保護者の困りに対し柔軟に対応できるよう初動対応を強化していく。

学校関係者評価	
実施日(令和3年2月19日)	
評価	意見・要望等
3	・学校生活では、行事なども含めて児童生徒が意欲的に段階的に学べるように、また、児童生徒の学習進度に応じた丁寧な授業の様子が見える。 ・保護者や関係機関などと連携しリモートなどを活用して頻回にできる環境が整いつある。今後も発展的な取り組みを行ってほしい。 ・リモートの授業は大変効率的だが、逆に馴染めない児童生徒もいると感じている。児童生徒の実態に応じた取り組みができることよい。 ・精神科の受診は若年化してきているケースが多い。親の手に負えなくなっている。学校教育の必要性が求められている。 ・北病院中央病院どちらを受診しても双方の学校を利用できるようにするようなシステムに変えていくことができないだろうか。
3	・キャリア教育の年間計画にそって、自立した児童生徒を描きながら今後に向けた進路学習を積極的に進めていく必要がある。 ・いじめの問題がないことは大変良いことである。SNSの使い方については今後もルールを守りながら見守っていく必要があると考えられる。また、早期発見早期対応を心がけ、日頃から児童生徒の心情に寄り添った指導を心がけてほしい。 ・病弱特別支援学校の高等部の設置についてなかなか実現につながらない。 ・転入転出に伴い、授業計画を立てていくことが困難な事例が多い。
3	・教育相談も含めて、今後も校内での教育活動を校外に発信していくことが大切である。HPをリニューアルし、ブログ等を活用した発信を積極的に行っていくことはとてもよい。 ・教育相談件数は相変わらず多い。校内の指導の知見を整理して外部の相談に丁寧に対応していくことが求められている。 ・今年度はコロナ禍で教職員も児童生徒の指導以外に緊張感が強く負担は大きかったのではないかと。また、臨時休業のために授業時数も増えたことも影響していると考えられる。 ・サポートルームの在り方について高校生からの個々のニーズに応じた段階的な対応が求められている。専門性の向上とともに、柔軟な指導ステップの提案の検討を続けてほしい。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。
(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的な対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。